

認知症対応型通所介護事業所  
(認知症デイサービス)

## 事例7

### 関係者の連携から生まれた安心感の下で ～うつ病を合併している方へのケア～

紀子さんは82歳。当デイサービスを利用し始めた頃は、著明な意欲低下、緊張、不安感がみられ、無為、無動であり、表情も陰しく、会話もなく、拒薬、拒食も見られました。私たちは、かかわり方にとまどいを感じながらもつぎのように支援していききました。早くデイサービスになじむよう、決して無理強いせず、紀子さんのペースで過ごしていただけるよう配慮し、職員の声かけも密にしていききました。

また、うつ病のための服薬治療が行われていたため、その服薬管理と紀子さんの表情や症状、デイサービスでの様子等の観察を行い、主治医やケアマネージャーとの連携を密に行っていました。その中で紀子さんへの対応のまずさを指摘されたこともありました。その後は、デイサービスでのケアや紀子さんの状況に変化があったときには関係者のミーティングを速やかに行うようにしました。

利用開始から2ヶ月がたった頃、自分のために多くの人に関わり、気にかけてくれていることへの感情が表情や言葉として現れてきました。症状の出現も少なくなり、安心感が増してきたようです。紀子さんの表情も豊かになってきました。

そこで、これまでのかかわりを振り返り今後のケアについて話し合いました。その結果、職員と紀子さんの関係は今まで通りのかかわりを続けながら、レクリエーション活動時には他の利用者との交流が出来るように支援をしていくことにしました。レクリエーション活動時には職員も一緒になって楽しみ、内容の充実を図りました。最近では、あいさつや感想、意思表示などの豊かな会話や表情、おしゃれをするといった社交性が出てきています。

紀子さんの持っている五感を大切にしたい働きかけをしたことや、関係者との連携を密にしたことが、いい結果につながったのだと思います。

最近では少しずつ認知機能の低下が見られ始めていますが、穏やかにやさしい眼差しで職員やほかの利用者を見つめる紀子さんのそばに寄り添って『楽しみ』や『喜び』と一緒に積み重ねていければと思います。

## ポイント

うつ病の療養中に認知症が併発することがあります。うつ病による意欲の低下、やる気の低下、不安感に加えて認知症の症状のために症状が重くなり介護が難しくなります。うつ病のための内服管理も介護していく上で大切です。

うつ病と認知症のそれぞれの病気の特徴を理解して介護上の注意点に配慮しながら丁寧に支援を続けており、事例の方が少しずつ安心感を得てレクリエーションに参加する様子が印象的です。

## メモ

### 用語<不安感>

認知症の方は自分が認知症であるという完全な病識を持つことはありませんが、今までできたことができなくなり、もの忘れがひどくなってきているという病感があることは珍しくなく、それによって不安や焦燥などの症状が出現することがあります。

また、周囲の状況や自分自身の状況についても理解できないことが不安を強めることもあります。



その人らしく生きることを支える  
～楽しい時間を共に過ごす～

いつものように朝のお迎えでシゲさん宅を訪問したときの事です。

職員A「おはようございます、シゲさん！お迎えにあがりましたよ。」

シゲさん「おはよう。今日はねえ、孫の野球の試合があってねえ…、本当は応援に行こうかと思っていたさあ。」

職員A「そうなんですか？じゃあ今日はお休みしますか？」

シゲさん「ううん。行くよう。休むと大変だからねえ。」

職員A「そうですか。じゃあ、車に乗りましょうか。」

職員B「お嫁さん、今日は野球の試合があるんですか。」

お嫁さん「そうなんです。息子の入っているチームがすぐそこの中学校で試合をするんですよ。だから、今日は準備が大変で…」

職員B「それは大変ですね。シゲさんは私たちに任せて楽しんできて下さいね。」

事業所へ戻って他の利用者の送迎も終わり、朝の体調確認も済んだ頃、職員から、今朝のシゲさん宅でのやり取りが申し送られました。そこで急きょ「皆で野球の応援へ行こう」ということになりました。

孫の試合を楽しみにしていたシゲさんにそのことを伝えたところ、目を輝かせて喜んでくれました。ご家族へも野球の応援に行くことを伝えると、会場で一緒に応援しようということになり、シゲさん、ご家族、他の利用者、職員による大応援団が結成されました。

シゲさんは、お孫さんのプレーを一生懸命見つめながら、「私の孫は頑張っていますよ！」と何度も何度も言っていました。シゲさんにとって、大切なお孫さんとの良い思い出になったように思います。

## ポイント

認知症デイサービスならではの対応事例です。認知症デイサービスは、小規模ながら介護職を比較的厚く配置するようになっており、利用者の思いに沿った柔軟な介護が行えるようそれぞれの施設で努力し工夫しています。

事例では、野球の応援などそのときどきの利用者の思いを大切にして、やりたいことはできる限り実現できるように心がけていることが伺えます。



## 事例 9

### 顔なじみの関係づくり ～閉じこもっている方への支援～

コウジさんは72歳。見た目にはそこら辺にいるおじさんと変わらないくらい元気ですが、認知症のため著しい記憶障害があります。定年退職後は趣味もなく、毎日家に閉じこもりビールばかり飲む生活を続けていました。心配したご家族から、「なんとか1～2時間でも外出する機会をつくって友人づくりなど社会交流を支援してほしい」と相談を受けて、デイサービスの利用につながりました。

コウジさんは、これまでも何力所かデイサービスの利用を試みたことがありましたが、人見知りが激しくてなじめず、利用が長続きしませんでした。

今回デイサービスを利用開始するにあたって、私たちはまずコウジさんと顔なじみの関係になることをめざして、一か月ほどにわたって毎日自宅を訪ねました。そして、コウジさんに顔を覚えてもらい、友人のような関係性を作るまでにいたりしました。そこで、「たまには外に遊びに行きませんか」と声をかけたところ、ついに誘い出しに成功しデイサービスの利用が始まりました。しかし、1日おきだと昨日のことを忘れてしまい、デイサービスに行くことをごねることがあったため、現在では1日の利用時間を3～4時間として毎日利用できるようにし、休むことなく通うことができています。

今後もデイサービスの利用が長続きするように、デイサービスでの過ごし方について職員皆で検討をしました。まず、コウジさんの一日の生活リズムを丁寧に観察することから始めました。すると、コウジさんが不安になり落ち着かなくなる時間が決まっていることがわかりました。そこで、ご家族の協力を得てコウジさんの好きなものを教えていただきました。コウジさんは囲碁や麻雀といったゲームが好きなことがわかり、私たちはコウジさんにデイサービスでの時間を楽しく過ごしてもらうため、いつでも大好きなゲームに興じることができるよう工夫しました。

それでも時々、不穏になることはありますが、少しでもコウジさんが楽しい時をデイサービスで過ごすことができるようにこれからも工夫を重ねていきたいと思えます。

## ポイント

もともとの性格や生活習慣に加えて認知症のために「閉じこもり」になる場合があります。介護保険の従来型のデイサービスでは、閉じこもりの方への関わりは制度上困難でした。現在の認知症デイサービスでは、閉じこもりの方へのケアも事例のように取り組むことができます。

毎日、自宅を訪問して関係作りを重ねて、それから徐々にデイサービスに導入するように試みます。デイサービスでも一人ひとりの興味や関心に沿ったプログラムを行うことができます。

## メモ

### 用語＜記憶障害＞

認知症の初期の頃は、新しいことが覚えられない短期記憶障害が目立ち、長期記憶（過去に記憶していたこと）は保たれています。

日常生活の中では、食事をした後に食事をしたこと自体を忘れてしまうなど、老化によるもの忘れと違い体験そのものを忘れてしまったり、何度も同じことを尋ねたりといった行動が表れてきます。

しかし、症状が進むと、過去に記憶していた経験を忘れてしまい、例えば自分の名前といった当然覚えているはずの記憶が失われていきます。

## その人を見つめて ～若年性認知症の女性との関わり～

明子さんは46歳。若年性アルツハイマー病と診断されてから4年が経ちました。

認知症の症状から家庭での生活ができなくなった明子さんは病院の認知症病棟に入院していました。しかし、殺風景な病院での面会のたびに「わずかな時間でも生活の楽しさや幸せを感じさせたい」との家族の想いが強くなり、家族的関わりのある認知症対応型通所介護サービス（デイサービス）の利用を始めることになりました。

明子さんは、意志の疎通がほとんど取れず、室内を歩きまわったり、時折乱暴な行動がみられました。「食物」に対する理性が効かず、隣の人への配膳に直ぐ手を出したり、自分の思いが通らないと手を振り上げるなどの行動が日常的にありました。

そこで、デイサービスにおいては、フロアを歩く明子さんに対しては「名前での呼び掛けや話しかけ」を徹底し、顔を合わすスタッフは明子さんの姓か名で必ず呼びかけるようにしました。

また、本の読み聞かせをする時や、明子さんが両手を後ろに回して歩きまわる時でも、スタッフは常に明子さんの名前を呼びながら肩に手をまわしたり、一緒に歩きながら歌を歌ったり（本人は聴くだけですが）して、積極的な関わりとスキンシップを実行しました。

デイ活動では、決して明子さんに指示をしたり、その行動を抑止したりせず、常に明子さんの気持ちを受け入れ寄り添うように心がけました。こうした日々の関わりの中で、スタッフの声かけ、スキンシップ、アイコンタクトでの話しかけを徹底した結果、明子さんは次第に落ち着きをみせるようになりました。まだ、室内の歩き回りはありますが、みんなと一緒に「食事」を落ち着いて食べられるようになりました。

明子さんの情緒の安定化は目に見えて良くなり、ほかの利用者の話しかけに静かに応じたり、時に涙ぐむなど、感情を表に出すことも観られるようになりました。ある時、他の利用者の面会に来た子供を抱き上げ頬ずりをしたり、ある絵本の「乳児の顔」に頬ずりしたりするなど「母親」のような優しい面影を見せることがありました。その表情にアルツハイマー病であっても母親の片鱗を見せられたことにスタッフが感激したのでした。

今日もいつものようにフロアをトコトコと歩いている明子さん。スタッフ一同はこれからも変わらぬ愛情と支援を続けていきたいと思えます。



## ポイント

事例は46歳の若年性アルツハイマー病の方で、42歳の時に病気を診断されています。ご家族の詳しい状況がわかりませんが「母親の片鱗」などの記述からお子さんのいらっしゃる方なのでしょう。発病して診断がつくまで、次第に家事ができなくなり、今までのお母さんとは全く異なる行動を示す様子にご家族はどれほど戸惑い悩んだことでしょうか。病気とわかってからも、明るく優しい母親が落ち着きがなく怒りっぽく、意味の分からない行動をすることにご主人や子どもさんはさぞ心を痛めたことでしょうか。現在は言葉も失われて重度認知症の状態ですが介護者の積極的で丁寧な関わりにより落ち着きをとりもどし穏やかな表情を示すようになってきています。認知症の人の心を大切にされた温かい支援の様子が伝わってきます。

## メモ

### 用語＜若年性認知症＞

若い人や働き盛りの人にも認知症が現れることがあり、18～64歳の年齢の認知症を「若年性認知症」といいます。

若年性認知症の場合には、①進行が早い、②行動障害が生じやすい、③介護負担が大きい、④周囲の人に病気が理解されない、⑤家族の経済面や子どもの心理面への影響が大きい、⑥施設や支援制度が少なく介護保険が使えないことがある、などの問題があります。

若年性認知症の人やご家族に対する支援と疾患の理解を深める取組は今後の重要な課題です。

## ある男性の場合

若年性認知症の介護にはさまざまな困難があります。ある50代後半の男性の方は、病院を受診する1年ほど前から運転し慣れた道を間違え、たびたび車をぶつけるようになりました。家族が運転を止めると怒り出し手を挙げます。職場でもミスが増え、意味の分からないことを言い出したため休職になりましたが、結局、退職を余儀なくされました。

退職後もふいに夜中に起き出して仕事に行くといい出すため奥様は夜も落着いて眠ることができません。祝いの席で他人の料理にハシを入れたり、残った料理を強引に持ち帰ろうとして奥様は恥ずかしい思いをしたこともありました。人目をばからず立ち小便をしてご近所から苦情を言われ、その都度、奥様が謝りに行っていました。夫の変化にご家族は何が起こったのかまったく分かりませんでした。

いくつかの病院を受診し、最終的に若年性認知症と診断され、ようやくこれまでの異常な行動の原因が分かりました。その後、病気が進行し、次第に言葉が失われてきて会話ができなくなりました。発病して数年経過し、現在は常時オムツが必要な状態です。当初のような著しい行動障害はなくなりましたが、逆に自分ではまったく何もできません。生活のすべてに介護が必要な状態です。デイサービスを利用して日中の介護の負担を軽減していますが、これから先、何年もお主人を介護していくことを考えると奥様の不安が消えることはありません。経済的な不安もあります。そんな中で、介護サービスのスタッフの温かい支援は奥様の心の大きな支えになっています。